

## 本学における米国語学研修の可能性を探る —オハイオ大学との交流を通して—

### A Course Proposal for the English Language Instructions in OPIE: Through the Collaboration with OU

佐々 智将 (高等教育推進センター)

#### Abstract

Starting the academic year 2016, as part of the curriculum reform of the English language courses in IPU (Iwate Prefectural University), the university will start offering a new English course in which students will be enrolled in the ESL (English as a Second Language) courses in Ohio University (OU: located in Athens, OH). The purpose of this report is twofold; first, I will summarize the history of the relationship between OU and IPU, making special references to the earthquake-tsunami relief that OU and IPU both had been deeply involved in. Then, as a second main issue, I will present a course proposal and description of the English language training program with OU, presenting some of the information about OU and its specialized ESL institute, OPIE (Ohio Program of Intensive English) that I collected through my visits to OU in February and in September in 2015.

キーワード：オハイオ大学、海外語学研修、学生間国際交流、震災復興

#### 1. はじめに

本学において、2015年度より施行された、いわゆる「英語教育改革」の柱の一つとして、「応用英語」科目(群)の新設がある。この「応用英語」は、全学生1・2年次必修の「英語基礎・実践演習」のほかに、更なる英語学習を希望する、意欲的な学生のために開講される授業科目の総称である。本学、高等教育推進センターでは、応用英語科目群の一つとして、英語圏における英語語学研修の可能性を模索し続けてきたが、関係諸氏のご尽力のおかげで、2016年度より、「応用英語II(オハイオ大学語学研修)」という形で実をむすぶ目処がついた。

本稿では、2016年度より開講される「オハイオ大学語学研修」のプロジェクト内容を概説すると共に、2011年より続けられてきた、本学とオハイオ大学の交流についても、振り返ってみることとする。主に、筆者が実際に交流の場で経験したことを述べる予定であるが、筆者の本学への赴任は、2013年4月であるため、それ以前の経緯に関しては、適宜、外部資料、関係者への取材を通して得られた情報を基に、論を進めることとする。

#### 2. オハイオ大学について

このセクションでは、まず簡単にオハイオ大学の紹介をすることにする。本セクションで述べられている情報は、特に断りがなかり、筆者の経験、若しくは、オハイオ大学ウェブサイト (<https://www.ohio.edu/>) からの情報である。

オハイオ大学は、米国オハイオ州の南東部、アパラチア山脈の西端付近に位置する、アセンズ(Athens)市にある総合大学である。アセンズ市は、人口約2万3千人(2010年調査による)。ウィキペディア：[https://en.wikipedia.org/wiki/Athens,\\_Ohio](https://en.wikipedia.org/wiki/Athens,_Ohio) で、州都コロンバス市より、車で1時間半から2時間の距離にある、筆者の個人的な印象ではあるが、典型的な

アメリカ中西部の「大学街（都市）」である（なお、アセンズ市に最も近い空港は、コロンバス市にある、フォート・コロンバス国際空港(Fort Columbus International Airport)である）。



写真1 アセンズ中心街  
(2015年9月筆者撮影)

市内には、オハイオ大学を中心として、キャンパスから歩ける範囲に昔ながらの中心街があり(Historic Athens)、学生生活に必要な買い物、または食事などは、ほぼ、アセンズ中心街ですませることができる。一方で、大型店舗の郊外化は、アセンズでも例外ではなく、大型スーパーマーケット（日本食を含めたアジアの食材も購入可能）、大型ディスカウント・ストアなどは、ハイウェイ沿いの郊外に軒を連ねている。これら店舗での買い物については、アセンズ市営バスが、月～土曜日で運行されているので、それを利用することができる。このように、典型的な「大学街」にあるオハイオ大学は、1803年に開校された。開校時は、「学生3名、教授1名、建物1棟」

(<https://www.ohio.edu/students/history.cfm>)という

規模であったが、それから二百数十年を経た現在では、学部生の在籍数17,660名、大学院生5,036名、カレッジの数11、とオハイオ州を代表する、アメリカ中西部有数の有名校への発展を遂げた。本プロジェクトと特に関係の深い、“College of Arts and Sciences”、もしくは、日本では「リベラルアーツ・カレッジ」として知られる学群では、909にも及ぶ領域で学士号、201の領域で修士号、ならびに48の領域で博士号を授与することができる。日々、約4千名もの学部生、726名の大学院生が、カレッジ・グリーンを中心とする、美しいキャンパスで大学生活を送っている(<https://www.ohio.edu/cas/>)。

### 3. 本学とオハイオ大学との交流について

本学とオハイオ大学の交流は、2011年の東日本大震災にまでさかのぼる。震災後、オハイオ大学言語学学部学部長で、オハイオ大における日本語教育、日本関係の責任者であるクリス・トムソン(Chris Thompson)教授のイニシアチブのもと、オハイオ大学における、復興支援プロジェクトがスタートした。トムソン教授ご自身も、震災前からご自身の研究のため、岩手県(旧)東和町(現花巻市東和町)を度々訪れるなど、岩手に大変ゆかりのある方であり、またオハイオ大学学長、ローデリック・マクデイヴィス(Roderick McDavis)氏の英断もあり、以降5年に亘るオハイオ大学の地震・津波復興支援がスタートした。

震災当年、2011年に行われた、最初の合同事業は、9月の大槌町での「菜の花プロジェクト」への参加、並びに大槌町内の河川清掃で



写真2 2014年「菜の花プロジェクト」  
写真中央に金山文造氏  
(写真提供 三輪陽子氏)

あった。この「菜の花プロジェクト」への参加は、第2回、2012年以降も続けられ、今年度、2015年も、大槌町在住の金山文造氏のご協力の下、大槌川河川敷に、菜の花の種まきを行った（「菜の花プロジェクト」に関する情報は、フェイスブック：<https://www.facebook.com/nanohanaPJS/>に詳しい）。

オハイオ大・県立大の復興支援は、3年目、すなわち2013年に転機を迎える。「菜の花プロジェクト」への参加は、そのまま続けられたものの、加えて、現在本学において「水ボラ」として知られる、仮設住宅入居者への水・茶の配布事業がスタートした。この「水ボラ」へは、本学、オハイオ大の学生に本庄国際財団が加わり、本庄国際財団の基金で日本に留学している学生も加わった、「合同水ボラ」という形で、更なる被災地への支援、並びに3団体の学生交流が加速した。2014年もまた、「合同水ボラ」と云う形で、支援・交流が続けられ、地元高校生（大槌高校、なお13年、15年は高田高校）との交流、「語り部」の講和、地元伝統芸能観賞（14年度大槌町、15年度は大船渡市）、および3団体合同のバーベキューパーティーなど、活動内容も、益々充実したものとなった。

本年度、2015年度は、活動を大船渡市にも広げ、これまでで最大の規模の「合同水ボラ」となった。以下に、岩手県立大学・盛岡短期大学部の千葉啓子教授が作成された、本年度の参加者等の情報を掲載する。

◆ 平成27年度 県大・オハイオ大学・本庄国際奨学財団合同復興支援ボランティア活動・交流事業 参加者

- ・日時： 平成27年（2015年）9月25日（金）～27日（日）
- ・活動地： 大槌町、大船渡市、陸前高田市
- ・参加人数  
岩手県立大学： 学生34名、教職員19名  
オハイオ大学： 学生15名、教職員5名  
本庄国際奨学財団： 奨学生22名、スタッフ4名  
（その他、岩手県立高田高校生徒、教員）

（「岩手県立大学」には、四大部、盛岡・宮古両短期大学部の学生を含む。「オハイオ大学学生」とは、今年度中部大学、武蔵大学へ交換留学生として在籍している学生をさす。）



写真3 本年度「合同水ボラ」記念写真  
（真ん中に鈴木学長。筆者左下）

今年度は、ボランティア活動終了後、鈴木厚人岩手県立大学学長も加え、最終日である三日目に「解散式」を盛大に行い、本学からオハイオ大学、本庄財団への感謝状の贈呈、またオハイオ大学からは、鈴木厚人学長、千葉啓子教授への親書の贈呈、と一連の活動を締めくくるセレモニーも行われた（なお、鈴木学長は、二日目からの参加）。さて、まったくの「私事」で誠に恐縮であるが、ここで筆者とオハイオ大学との「交流」について、簡単にまとめてみ

たい。筆者がアセンズの街を始めて訪れたのは、2014年の2月である。その際、本プロジェクトで最も重要な役割を果たす“OPIE: Ohio Program of Intensive English”について、始めて説明を受けると共に、「合同水ボラ」についても、始めて耳にすることとなった。本学において英語科目を担当する筆者にとっては、OPIEの説明にも大変関心はあったが、実はそれ以上に、釜石市鶴住居町出身である筆者には、「合同水ボラ」の方が関心は大きく、同年の水ボラ参加を約束してアセンズを後にした。約束どおり（と云う訳でもないが）、同年2014年秋の「合同水ボラ」から、ボランティアのお手伝いをさせていただくこととなり、それ以降、2014年11月に水ボラ（オハイオ大よりトムソン教授参加）、2015年7月の「菜の花プロジェクト」準備のための大槌川河川敷清掃、そして、今年度の「合同水ボラ」に参加させていただいている。無論、活動の中心は被災地復興支援であるが、その中で、トムソン教授を始めとしたオハイオ大学関係者、本学関係者との間で、極めて「インフォーマル」にはあるが、本プロジェクトの「青写真」を描くこととなった。そして、前述のように、その「青写真」が現実のものになろうとしているのである。

さて、論を本筋に戻そう。上述のように、本年度、2015年度は、オハイオ大学復興支援の最終年度にあたり、これまでのような活動は、「一旦終了」という形になった。しかしながら、オハイオ大学との交流も、このまま「一旦終了」で、良いのだろうか。そのような疑問にある中、大変僭越であるが、筆者は「応用英語」の中の一科目である「海外語学研修」担当者として、「オハイオ大学での、英語語学研修の可能性を探る」と云う業務を与えられた。以下、4節以降においては、筆者のこれまでのOPIE視察をまとめると共に、「応用英語」として開講される語学研修の内容についても、現段階（2015年11月時点）で決定している事項をご報告申し上げることとする。（本節で提示された情報の殆どが、2015年IPU Festaのため千葉啓子教授が作成された資料による。更に、オハイオ大学トムソン教授、本学高等教育推進センター特命課長の関屋氏にも、情報提供をいただいた。）

#### 4. OPIE (Ohio Program of Intensive English)での語学研修について

本節では、筆者の2015年2月、9月のOPIE視察について報告する。4.1節において、OPIEについて報告し、次節4.2.において、オハイオ大学での生活について概説する。（OPIEとは、‘Ohio Program of Intensive Program’「オハイオ大学附属集中英語プログラム」の略である。以下、特別な理由がない限り、OPIEと略し、また、その頭文字の説明も、割愛することとする。）また、本セクションの情報は、特別な断りがない限り、OPIEパンフレット、OPIEディレクター・カージック(Gerard Krzic)氏に作成いただいた「協定書案」、並びにカージック氏への口頭取材、また、筆者が2015年2月、9月に経験した事柄を基にしている。

##### 4.1. OPIE 概説

オハイオ大学附属英語集中プログラム、OPIEは1967年に設立された。現在のディレクターは、ゲリー・カージック氏であり、カージック氏を始め、OPIEで英語を指導する教員は、アメリカ国内外での豊富な指導経験を有している（カージック氏は、中部大学での指導経験あり）。OPIEで学ぶ学生は、大きく分けて二つのタイプに分けられる。まずは、オハイオ大学（を始めとした、米国大学）への入学を希望するが、TOEFL (Test Of English as a Foreign Language、米国留学希望者の英語力を測るために、ETS(Education Testing Services)によって開発された試験)、または、それに代わる英語能力の証明がない留学（希望）生へのフルタイムの英語指導。また、オハイオ大学への入学許可がおりたものの、大学の授業に適應できるだけの英語能力が認められない留学生への、フルタイム、またはパートタイム

の英語指導、の二つを主要な業務にしている。

よって、OPIEの授業の主眼は、「大学準備講座」であり、米国大学における英語能力の準備、といった性格が強い。無論、学生は皆、米国大学内、周辺で生活しているため、日常会話の訓練も、全くない訳ではないが、いわゆる「英会話学校」のように、日常会話、海外旅行者用の会話をメインにしたカリキュラムではない。(しかしながら、これは、必ずしも、OPIEは日常会話の指導を拒んでいる訳ではない。後述することになるが、単独グループ専用の英語クラス、例えば、岩手県立大学の学生のみで構成された、特別クラスであれば、カリキュラムの内容は、かなり自由度が高いものになる。例えば、「日常会話の練習を中心としたプログラム」というのも、決して不可能ではないだろう。)

OPIEの授業をフルタイムで受講する学生は、一コマ50分、一日4コマの英語の授業を履修することになる。一日のスケジュールは、写真4 Shively Hall (寮)のStudy Lounge (右側がカージック氏)



写真5 中級コア(文法)クラス  
(学生の発表中心に授業が進む)

「コア・クラス」は、本学の「英語基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を想像していただくと、イメージが付きやすいだろう。基本的には、文法の授業ではあるが(筆者が2015年9月に見学した際には、「現在完了」を扱っていた)、テスト対策ではなく、効果的なスピーキング・ライティングのために、正確な文法・語法を見に付けることに主眼が置かれていた。よって、授業も、教科書の問題演習だけではなく、実際に、会話、短文の作文の練習を中心に授業が進められていた。

II)リーディング・ボキャブラリーの授業は、I)に比べ、若干大学の授業を意識した授業内容になっている。すなわち、課題として、学生は指定されたリーディングを終わらせた上で授業に参加し、授業はリーディングの内容を確認する、という形で授業が進められていた。また、読解の訓練に加え、英語の語彙増強のための指導(接頭辞、接尾辞、語根の解説)も並んで行われていた。

III)のスピーキング・リスニングは、II)では、「目から」得ていた情報を、「耳

から」得ることに主眼を置いている、と述べて語弊はないだろう。筆者が見学させていた日には、リスニングの訓練中心であったが、学期全体のスケジュールでは、スピーチ(プレゼンテーション)も計画されていた。II)、III)とも、筆者は、中級(intermediate)レベ

ルの授業を見学したが、扱っている「テキスト」の内容は、それ程専門的ではなく、大学1～2年生を対象とした「一般教養」の授業で課されるリーディング程度の難易度であるように感じた。また、教員のアプローチ方法も、学生の発表を中心に進める教員、学生の参加を促すものの「講義形式」に近い教授法の教員、学生のグループワークを中心に進める



写真6 読解・ボキャブラリークラス  
(接尾辞の解説、その後問題練習)



写真7 リスニング・スピーキングクラス  
(講義を聞いた後、内容確認)

教員、と教授法も、バラエティーに富んでおり、学生も様々な角度から英語の訓練にアプローチすることができる。なお、OPIEの授業は、月・火、木・金の週4日であるが、水曜日は、「終日休講」と云うわけではない。水曜日は、「発音クリニック」(言語学学部の大学院生による、発音上達のための個人指導)への参加、授業担当教員との個人面談、クラスメートとのグループワークによる課題への取り組み、と授業準備、個人の目的に応じた個別指導の日になっている。

#### 4.2. オハイオ大学での生活について

さて、OPIEの主な業務は留学生のための英語の授業の運営であるが、その業務はそこにとどまらない。授業以外で、OPIEが留学生のために行っている業務として、課外活動の計画、ならびに寮生活のアレンジ、の二点が挙げられる。課外活動としては、ウェルカム・フェアウェル(さよなら)ピクニック等のキャンパスを離れた活動から、クラブ活動の紹介、会話パートナーの斡旋など、OPIE学生間、またOPIE学生とアメリカ人学生の交流事業も、積極的に提供している。

また、授業が終わった後の学生生活、すなわち、寮生活に関してのアレンジも、OPIEの主要業務の一つである。OPIE履修者は、原則的には寮生活を送ることになる。その際の、ルームメートのアレンジもOPIEの主要業務のひとつであり、「同じ国・地域出身の者同士での、ルームシェアは行わない」を大原則として、ルームメートをアレンジしている。(但し、「同じ国・地域同士」なので、もし、本学の学生が寮に入った場合、ルームメートは、現地学生かもしれないし、または、日本以外の出身の留学生かもしれない。)授業の中だけではなく、(たとえ短い期間であっても)日常的に英語でコミュニケーションを取らせる、ことに大きな「こだわり」をもって、OPIEでは、留学生の指導にあたっている。

さて、ここで、留学生、または本学学生が滞在することになるであろう、オハイオ大学の寮について、簡単に紹介したいと思う。本学学生のように、短期(1 Semester未満)の

滞在の（留）学生には、残念ながらどの寮に住むか、の選択は与えられない。基本的には、二人部屋に、一人で住んでいる学生にマッチングされることになる。が、どの寮に滞在することになっても、教室までは歩いて行ける距離である。すなわち、他大学などでは、寮に住んでいても、大学に通うためにバスなどに乗る必要がある場合もあるが、オハイオ大学では、その心配はない。

寮の部屋は、二人一部屋が基本的な住居パターンで、部屋にはシンク（本学研究室にあるシンクを想像していただければ、ほぼそのまま）、電子レンジ付き冷蔵庫、ベッド、机・



写真8 Shively Hall の一部屋  
（写真左にクローゼット、シンク）



写真9 シャワールーム・手洗い  
（奥：シャワー、手前：手洗い）

椅子セット、クローゼットが設置されている。手洗い、シャワー室は、フロアで共有、また、各階に、集会、談話、学習に利用できるラウンジが設置されている（写真4参照）。

寮のセキュリティに関しては、寮の住人以外は住人が鍵を開けない限り、たとえオハイオ大学学生、または教職員でも、寮の中に入ることはできない。また、先述のように、どの寮に入るということになっても、教室、図書館、学生センターからは、すべて歩ける距離なので、通学に不安はない（大学内に大学警察あり）。が、無論、夜中の一人歩きは、たとえ大学内でも、危険が伴うことは、変わらない。）

オハイオ大学では、寮に住む学生は「ミール・プラン」を購入することになっている。ミール・プランは、寮にあるダイニング・ホールで利用できる他、キャンパス内にある学生ホールのフードコートでも利用可能である（但し、全ての寮にダイニング・ホールが設置されている訳ではない）。さて、アメリカの食事、たとえば「多い・デカいが、マズい」との声も聞こえなくはない。が、筆者の主観だが、少なくとも筆者が夕飯をいただいたダイニング・ホールは、日本人学生にも満足できる食事が提供されているように感じた。

筆者が夕食をいただいた Nelson Court（キャンパスの南方になるダイニング・ホール）は、一日中食事が取れる訳ではないが、大学でも最も大きいダイニング・ホールである。食事は、アメリカン、イタリアン、アジアンなどのセクションから、利用者がバイキング形式で好きなものを選択する。「おかわり自由、食べ放題」なので、筆者は、一度の夕食で3-4回席を立ったのは、ここで述べるまでもないだろう。

ここまでは、OPIE 授業の様子を中心に、オハイオ大学に通う学生の生活について、筆者が見聞きした事柄をまとめてきた。次節からは、実際に本学学生をオハイオ大学に送り出し、OPIE 授業を履修させる、これらを中心に据えた授業の具体的な計画について、現

在の段階で決定していることをまとめることにする。セクションの目的としては、2016年度から開講される授業に関しての準備状況の「情報共有」をめざすと共に、学生を海外に派遣する際に、考慮すべき点についても、触れることにする。



写真10 Nelson Dining Hall  
(多くの学生と一緒に食事をとる)



写真11 サンド・バレーボールをする学生  
(奥手前は Nelson Court。息抜きも大事)

## 5. 応用英語Ⅱ「オハイオ大学語学研修」：コースの提案

本節は、内容の上から、二つの小セクションに分けることにする。セクション5.1は、「応用英語Ⅱ（オハイオ大学語学研修）」の概要を述べることにし、来年度（以降）開講される授業に関する「情報共有」を主眼とする。セクション5.2は、実際に本学の学生を、海外語学研修に派遣するあたり、考慮すべき点について、筆者の考察を述べることにする。

なお、本学学生の海外研修（語学のみならず、文化、社会、歴史）への関心、および、海外派遣を実施する際の問題点等に関しては、本学、佐藤智子教授の先行研究（佐藤(2012)）に詳しく論じられている。5.2節では、適宜、佐藤（2012）での論点、データにも触れて論を進めることにする。

### 5.1. 授業概要

このセクションでは、オハイオ大学派遣に関する基本情報をまとめてみようと思う。まず、授業の開講時期、方法であるが、2016年度後期授業として開講する予定である。授業の形式は、「二本立て」となり、その柱の一本は、言うまでもなく OPIE における語学研修である。これに関しては、後に詳しく述べることにする。

柱のもう一本は、派遣前の国内指導となる。その中心は、i) アメリカ生活・大学生活に関するオリエンテーション、ii) OPIE で学ぶために必要な F-1 ビザ取得のための準備、並びに、iii) OPIE でのプレイスメント準備のための TOEFL（を核とした英語指導）の三点が中心になる。特に、i) は、佐藤（2012）の報告にもあるよう、海外経験が少ない本学の学生にとっては、特に手厚く指導する必要があるものと思われる。

余談ではあるが、国内指導に関しては、本プロジェクト実施に際し、視察させていただいた中部大学・英語英文学科で開講されている「異文化理解演習Ⅰ」の授業を参考に、指導計画を立案させていただいた。中部大の「異文化理解演習Ⅰ」は、オハイオ大学への長期語学研修を希望している学生を対象に開講されている授業であり、その内容は、上記 i) アメリカ生活オリエンテーション、ii) アメリカ生活に必要な英語指導、のコンビネーションで



ある。授業回数、授業形式の違いから、中部大における指導と同じ形を本学で取ることは難しいと思われるが、長年に亘るオハイオ大学との交流の経験を有する中部大での実践は、本学にも大いに参考になった。

もう一つの「柱」、すなわち、派遣の時期であるが、第一回目の派遣は、2017年（2016年度後期）3月を予定している。具体的には、オハイオ大学が春休み中に、本学学生がアセンズに到着し、プレイズメント・テストまで終了し、春休み明け、一回目の OPIE 授業から、授業に参加できるようにする予定である。その後、3週間 OPIE 授業に参加し、3月下旬にアセンズを立ち、3月中に帰国（帰盛）できるような旅程を組むことにする。諸事情により、オハイオ大学の春休みの時期は、今後10年以内でも、2月下旬から3月中旬までと、年によって時期が大きく異なるが、本学の学生は、年度内に帰国できるように、スケジュールを組んでいただくことに、OPIE 関係者諸氏にもご理解、ご協力いただいた。

さて、ここで本学の学生が受講する OPIE クラスについて、簡単に触れておきたい。本学の学生は、OPIE によるプレイズメント・テスト（TOEFL 利用）の結果に基づいて、前項で述べた「初級・中級・上級」のクラスに配属される。すなわち、春休みあけからの「途中参加」であり、また3週間後の「途中退席」となる。この点は、OPIE ディレクター・カージック氏は無論のこと、OPIE を統括する言語学学部の学部長でもあるトムソン教授にも

ご尽力いただいた結果である。当初は、本学高等教育推進センター担当者、上記オハイオ大・OPIE 関係者間で、「岩手県立大学専用クラス」の開設の可能性も議論された。筆者としても、例えば中部大学のように、OPIE 内に専用クラスを設置していただくのに越したことはないと考えている。しかしながら、過去2年間に亘る議論の結果、OPIE 側より示された、専用クラス設置のための「最低人数」を考慮すると、（中部大のように）国際系、英語・言語系学部学科を四大部に有しない本学には、その最低人数を、（一回限りではなく）数年にわたりクリアするのは、極めて困難なのではないか、との結論に至った。

よって、第一回派遣の来年度から数年は、本学の学生は既存のクラスに途中から配属、という形になる。しかしながら、本センター、オハイオ大・OPIE とも、この形が、いわゆる「最終形態」ではなく、数年間派遣を続けた上で、必要に応じて派遣の形の見直しを行うことで合意している。その際、「岩手県立大学専用クラス」の設置もまた、再考することになることと思われる。が、現在のところ、本学（本センター）、オハイオ大学間の最重要事項は、交流を続ける、（少人数であっても）派遣を続ける、であり、「無理

をしない範囲での」派遣、交流を進めることに、同意していただき、また本センターとしても、それを基本方針にプロジェクトを進めている次第である。

学生は、「途中参加・途中退席」の形になってしまうが、これは、決して「ゲスト扱い」ではない。研修参加者は、OPIE 受講生同様、それはすなわち、オハイオ大学正規学生と同じ立場、ということになるが、完全に、正規学生と同じ権利を有する 'Full-time Student' と

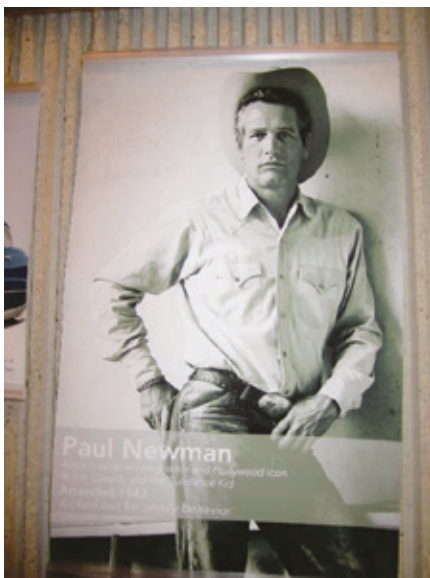


写真 12 ポール・ニューマン氏 (Paul Newman)。米国の俳優で、オハイオ大学在籍。但し素行不良で放校処分。

しての大学生生活を送ることになる。「権利」として与えられるものとしては、図書館、コンピュータ・ラボの利用から始まり、学生健康センターの利用（相談、簡単な治療は無料）、そして、スポーツ観戦チケットの学生料金での購入、また、学生用レクリエーションセンター（スポーツ、フィットネス）の無料利用まで含まれる。この点もまた、オハイオ大学、OPIE には、特別のお骨折りを頂いた。

但し、「権利」には、当然「代価」が必要になる。その「代価」が上述の「学生（F-1）ビザ」の取得であり、学生の行動は「アメリカ移民局」の管理の下に置かれることになる。これは、決して不必要に恐れることではないが、OPIE も移民局が求める授業内容、ポリシーを求められることになる。例えば、OPIE 受講者には、基本的には、理由のない遅刻、欠席は認められていないので、履修者は、より強い意志を持って研修に臨む必要がある。出欠のみではなく、履修者は OPIE 教員によって、参加した期間の成績も与えられ、その成績を中心に日本国内での学習も加味し、授業として総合的に評価（成績）が与えられる。

最後に、本研修の対象者、履修可能な学生についてコメントしようと思う。前述のように「応用英語」開設のねらいは、必修の英語に加え、更に自らの英語力を伸ばす意欲的な学生のニーズに応えることである。この点を考慮すると、参加者に、例えば英語習熟度の条件を設けるのは、開設のねらいに合致しないものとなる恐れがある。よって、本授業では以下のような参加条件を設けることにする。

イ) 真剣に自分の英語力の更なる向上をめざす者

ロ) オハイオ大学で学ぶ学生（現地学生、留学生）と積極的に交流できる者

ハ) 研修後も、本学とオハイオ大との交流に意欲的に貢献する意思のある者

イ) に関しては、改めて付け加えることもないだろう。ロ)、ハ) に関しては、本稿でも述べてきたように、これまでのオハイオ大学との交流、また OPIE の格別の配慮によって、本研修は実現した訳である。研修参加者には、本学とオハイオ大学の交流の「最先端」に立っていることを、常に自覚して欲しいと願っている。

さて、上記のように、履修条件には、英語習熟度に関する条件、制限は、一切設けないが、それでは、参加者は、OPIE での授業についていけるのだろうか、と云う疑問も湧き上がる。それに関する、筆者の考えをまとめてみようと思う。まず、OPIE の授業は、これまでも述べてきたように、レベル（習熟度）別の授業になっており、ディレクターであるカージック氏からの情報では、以下のような基準で、クラスを決定している。

・ OPIE クラス分けの基準：TOEFL は「紙ベース」の試験のスコア、受験者総数 97 名

イ) 初級(Elementary): TOEFL 350-390 TOEIC 347-433 42 名

ロ) 中級(Intermediate): TOEFL 400-450 TOEIC 437-510 37 名

ハ) 上級(Advanced): TOEFL 450-500 TOEIC 513-587 4 名

では、この基準をもとにすると、本学の学生はどのレベルに配属されるのであろうか。残念ながら、本学では TOEFL 試験を実施したことがないので、一概には論ずることはできないが、2014 年 7 月に実施された学内 TOEIC IP の結果を基に、シミュレーションしてみることにする

（なお、換算には Vancouver English Centre, <http://secure.vec.bc.ca/toefl-equivalency-table.cfm> のウェブサイトを参照にした）<sup>1)</sup>。結果として、全受験者 97 名のうち、42 名が（TOEFL 換算で）OPIE の初級クラスレベル、37 名の学生が中級レベル、そして、4 名の学生が上級レベルと判断される。但し、97 名中 14 名程、OPIE の初級レベルである、TOEFL350 点レベルに達していない学生もあったことは、付け加えておく。

以上のように、あくまでシミュレーションではあるが、本学の学生であれば、特別に英語習熟度を「履修条件」に設定する必要はなく、本学の学生の殆どが、初級から中級に配属されるであろう、と結論付けることが可能なのではないだろうか。むしろ、「英語習熟度」というよりも、これまで述べてきた、本学とオハイオ大学の交流の歴史を理解し、研修終了後も、本学とオハイオ大学の更なる交流に積極的に取り組める学生を積極的に参加させるべきなのではないか、と筆者は考えている。

## 5.2. 海外派遣に関する諸問題

ここまで、本学・高等教育推進センターとオハイオ大学・OPIE が協力して進めてきたオハイオ派遣プロジェクトに関して、これまでの進捗状況を報告してきたが、では、実際問題、来年度より授業として開講するにあたって、どのような点に思慮をめぐらせなければならぬだろうか。前述のように、本学における国際交流、学生の海外派遣に関しての諸問題に関しては、佐藤（2012）に詳しく論じられている。本節では、佐藤（2012）での論点を基にして、これまで述べてきた内容を検証してみようと思う。

まず、「派遣時期（研修時期）」であるが、佐藤（2012）によると、本学（含む盛岡短大部、宮古短大部）の学生の40.9%が夏休み、53%が春休みの派遣を希望している。この点に関しては、「2月下旬～3月上旬派遣」の本プロジェクトは、本学の学生のニーズにあっていけると言えるだろう。但し、「派遣の期間」に関しては、55.8%、すなわち過半数の学生が「2週間程度」の期間が理想としている。本プロジェクトのように「3週間程度」の期間を希望している学生は、全学で14%程である。

「派遣期間」に関しては、高等教育推進センターとOPIE間で調整が行われた結果、費用面だけではなく「教育効果」も考え3週間の受講に落ち着き、またOPIEにも多大なるご配慮、お骨折りをいただいた。また、佐藤（2012）に拠れば、全学的には、「3週間程度」の研修を希望するのは「少数派」であるが、学部によっては、25%程度の学生が「3週間程度」の研修を希望しているという報告もあるので、その点考慮いただきたく思う。

佐藤（2012）によると、約6割の学生が研修中の滞在先に「ホームステイ」がふさわしい、と回答している。佐藤（2012）は、「ホームステイは、実際にアメリカの家族に入って、24時間行動を共にできる最良の場である。さらに研修が終了してもホストファミリーとコンタクトを取ることができ、…（佐藤2012：9）」と指摘しており、この点に関しては、筆者も全く同意である。また、佐藤（2012）によると、「大学寮」を滞在先として希望した学生は全体で18%程度であり、滞在面では、本プロジェクトは、本学学生のニーズに合っているか、疑問に思われるかもしれない。しかしながら、本研修の第一の目標は、「アメリカの大学生活を経験」することであるため、大学生活を経験するためには大学生と共に、寮に住むことが理想的なのではないかと考えている。また、佐藤（2012）が指摘する「研修後のコンタクト」も、今日これだけ、ソーシャル・ネットワーキングが発



写真 13 コロンバス空港の Honda の展示。オハイオ州は Honda アメリカ工場を誘致し、日本とのつながりを深めている。

達した今では、寮生活で知り合った学生との、研修後の交流も、決して困難ではないだろう。また、佐藤（2012）の調査では、学部によっては25%以上の学生が（最多意見ではないが）「学生寮」への研修中の滞在を希望していることを、付け加えておきたい。

最後に、研修の内容に関して触れることにする。佐藤（2012）の調査によると、本学の学生の約8割の学生が、「英語とそれ以外の授業が半分ずつ」が理想の研修内容である、と回答している。これを佐藤（2012）は、「(せっかく2週間アメリカに行くのだから)、英語も少し話せるようになりたい、さらにアメリカ社会も実際に体験してみたいという願望の現れであろう(佐藤 2012: 12)」と解釈しており、筆者もまったく同意見である。ところが、これまで述べてきたように、OPIEの授業、または筆者が担当教員として提供できるのは、佐藤（2012）の言葉を借りれば、「全て英語能力向上に特化した授業」であり、このような研修内容を希望している本学学生は、佐藤（2012）の調査では、13%程度である。

これらの指摘を全く「無視」するつもりは、筆者には全くないが、それと同時に、まず、本プロジェクト・授業は「応用英語」の授業の一つであり、あくまで、「英語力」を向上させることを、第一の主眼においていることを指摘させていただきたい。また、ホームステイで経験するのは難しいかもしれない、独特の「アメリカ大学文化」も経験することは、参加者にとっては貴重な（語学以外の）経験になるだろう（但し、「課外活動」に関しては、学生の興味・関心、および積極性に大いに拠るところがある）。さらに、佐藤（2012）によると、学部によっては（最多意見ではないが）、14.5%、24.6%の学生が、「全て英語に特化した授業」を希望していることを指摘させていただきたい。

佐藤（2012）も、指摘するように、「せっかくアメリカに行ったのだから」、あるいは、言い方は悪いが「大枚はたいてアメリカに行くのだから」、英語も社会（文化、歴史...）も、と云う気持ちもわからなくはない。しかしながら、それを「一つの研修に」全て期待するのは、現実的ではないだろう。むしろ、受講者、受講希望者の希望に合わせて、複数の海外研修プログラムを「並立」させる方が、本当に学生のニーズに合った海外研修プログラムを提供できるのではないだろうか。その意味では、本学における、「教養科目」としての「アメリカン・スタディーズ」、「(応用) 英語科目」としての「オハイオ語学研修」の並立は、本学の学生のニーズに幅広く応えられる理想的な形なのでは、ないだろうか。

おわりに、佐藤（2012）内で、学生の海外研修を妨げる、最大要因として挙げられている、費用面について、コメントしたい。佐藤（2012）は、学生の海外研修を促すための、大学補助の必要性を述べている。この指摘に関しては、筆者も全く佐藤（2012）と同意見である。本プロジェクトでは、特に高等教育推進センター・企画開発部門の「オハイオ担当」の方々には、特に費用（学生負担）に関しては、格別のお骨折りを頂き、担当の方々のご努力、ご尽力を否定するつもりは、全くない。が、やはり事実として、経済的負担、というのは学生の海外研修を妨げる最大要因であると言っても、過言ではないだろう。

今後も、参加希望学生のニーズに合った、大学内外からの補助の可能性は探っていく必要もあるだろう。但し、佐藤（2012）も指摘するように、経済負担を抑えた結果「若者の貧乏旅行」のようになってしまうような研修では、それこそ「安物買いの銭失い」になってしまうだろう。前節の「ビザ」の項目でも述べたが、「権利」には、必ず「代価」（経済的な代価含む）が伴うことは、参加を考える学生には、常に意識して欲しいと思う。

## 6. Acknowledgement（謝辞）：「おわりに」に代えて

本来、このような報告書の最終節は、まとめにあたる文章がくるものであり、また、‘Acknowledgement’「謝辞」は、文末に注として述べられるものである。しかしながら、本

プロジェクトの実現に関しては、筆者の周りの方々のご尽力が極めて大きく、筆者は、先人が敷設したレールにのったトロッコで呑気に山を下ってきたようなものである。よって、本プロジェクトに関し、ご尽力いただいた方々を「注」の形で「付け加える」のは適当ではないと思われる。そこで、変則的だが、本編の中でお礼を申し上げることにする。なお筆者の無知による失礼がないよう、本節における敬称は全て「氏」に統一することにする。



写真 14 オハイオ大学トムソン氏の授業にて。前列左から本学川村大志（学生）、千葉啓子氏、筆者、前列右端がトムソン氏

まずは、オハイオ大学関係諸氏の中でも、クリス・トムソン氏、ゲリー・カージック氏に、改めて感謝の意を申し上げます。I would like to express my very special gratitude to Dr. Thompson, who always generously helped me/us when I/we visited Ohio all of a sudden, after giving him an extremely short notice. My special thanks also goes to Dr. Krzic, whom we always gave a hard time to in organizing this OPIE-IPU project. I always enjoyed working with him, who listened to us with generosity and in-depth understanding of the situations we have here in IPU. ありがとうございます。

オハイオ大学との交流に関しては、千葉啓子氏を始めとした盛岡短大部の皆様の大なるご尽力なしには語れない。また、熊本早苗氏、小川春美氏、そして吉原秋氏は、私のような「新参者」も快くお迎え頂き、またご指導頂き心から感謝申し上げます。

「水ボラ」を始めとした、復興支援では本学企画本部長である石堂淳氏を始めとした企画室総務グループの皆様が大変お世話になり、また広報担当の三輪陽子氏には、本稿で用いた写真の2枚の利用をご快諾いただいた。今後ご指導をお願いすると同時に、これまでの活動で、足を引っ張ってきたことをお詫びしたい。

OPIE 語学研修は、本学高等教育推進センターが中心になって進めてきた。本センター・センター長の佐々木民夫氏には、オハイオ大学との交渉の前線にお立ち頂き、我々実務担当者を叱咤激励していただいた。ここで、改めてお礼申し上げます。また、筆者の上司である姜奉植氏には、筆者の勝手な出張や、ボランティア活動への参加を快諾していただき、ここで特に心からの感謝の念を現したく思う。



写真 15 2014年筆者初めての合同水ボラ記念写真。前列中央に中村前学長  
前列左に佐々木民夫氏、筆者は右奥  
(写真提供 三輪陽子氏)

事務的な事項は、全く不得手な筆者に代わり、予算を始めとした交渉事を全て引き受けて頂いた、本センターの特命課長である関屋一博、また築田智子の両氏には、筆者が気づかない面を数多くご指摘いただいた。筆者のとめどない愚痴にもつき合わせてしまい、誠に恐縮である。また、学生の海外派遣プロジェクトの計画をしたことのない筆者にも、そのノウハウを快く提供して下さった、中部大学国際センターの北條、石鍋両氏をはじめとした皆様、並びに、「異文化理解演習 I」ご担当の英語・英文学科グレッグ・キング(Gregory King)氏にも、感謝申し上げます。

最後になるが、本プロジェクトの立案は、平成26年度からの3年間の学部等研究「岩手県立大学の基盤教育における英語教育改革と新英語カリキュラム：その成果と課題についての考察」によって、一部サポートされている。「金食い虫」である筆者の視察に、快く送り出していただいた共同研究者諸兄に、改めて感謝申し上げますと同時に、本プロジェクトを「応用英語」科目として提供することに、ご理解をいただいた本学高等教育推進センター・英語部門教員の諸氏にも、心より感謝申し上げます。

このように、数多くの方々のご理解、ご協力によって実施までこぎつけた「OPIE 語学研修」であるが、今後とも、関係各位のご指導をお願いし、本報告書はここで、筆を一旦おくことにする。なお、本報告書にあるエラーは、全て筆者に帰属する。All mistakes are mine.<sup>2)</sup>

## 注

1) サンプルとして、最新のデータを用いなかった理由として、2014年7月実施の試験は、筆者が主担当であり、受験者の様子をよく知っていること、サンプル数が十分にあること、そして、受験者に殆ど盛岡短期大学生（原則として、本研修とは直接の関係がない）がいなかったこと、が挙げられる。

2) 「語学研修」としては、本文中にお名前を挙げさせていただいた方々への「謝辞」は述べさせていただいたが、「原稿」に関する「謝辞」として、高等教育推進センター紀要の編集委員長である、熊本哲也氏に、心より感謝申し上げます。この「論文」とも「報告」とも取り得ない原稿を、期限よりだいぶ遅れてしまったにも関わらず、採用していただき、改めて御礼申し上げます。

## 引用文献

佐藤智子 (2012). 「アメリカ研修の推進 / 阻害要因と対策－岩手県立大学の事例研究－」、『岩手県立大学 外国語教授法の研修 第1号 2012年9月』。岩手県立大学外国語教授法研究会。

## 参考文献

College of Arts and Sciences, Ohio University: <https://www.ohio.edu/cas/>

Ohio University: <https://www.ohio.edu/>

OPIE (Ohio Program of Intensive English): <http://linguistics.ohio.edu/opie/>

Vancouver English Centre: <http://secure.vec.bc.ca/toefl-equivalency-table.cfm>

Wikipedia article (Athens, Ohio): [https://en.wikipedia.org/wiki/Athens,\\_Ohio](https://en.wikipedia.org/wiki/Athens,_Ohio)

大槌町「菜の花プロジェクト」: <https://www.facebook.com/nanohanaPJS/>